

第1章 「もの」と「こと」の意味論 ③

第3節 3代真柱葬儀の「こと」化を考える

天理教では、人間が死ぬことを「出直し」と教えられる。この死即続再生という死生観には、聖俗二つ一つの側面がある。その一つは、人間の身体は親神からの「貸しもの・借りもの」であり、「出直し」とは身体の貸し主である親神の懐に、借りた魂が帰り「行く」という解釈である。もう一つの意味は一般用語で過去を顧みて原点に戻り「出直す」ことの意味である。日常用語では「出直す」ことは人間の死と同義ではない。しかし天理教者は、生きながらにして「出直す」ことを、死の受託をもって再出発するという決意であると解釈している。「一日生涯」の教えは、日々を「出直し」の覚悟を以て生きるという思想の根幹であるといってもよい。凡人には言うが易し行いが難しである。しかし、偉大な人物の「出直し」は、他者にそれを強烈に可能にさせる力をもっている。それを活かすかどうかは遺された生者側にある。この意識がなければ「出直し」の告別式は単なる葬送儀礼に終わるであろう。つまり、葬儀の諸祭文の「ことば」は通例、故人の略歴やすぐれた業績を語る「もの」としてあり、その「もの」が、遺された葬儀参列者に生きて自らが「出直す」というあらたな「出来事」をもたらさないならば、それは故人に対して最も残念な「偲び」方となる。つまりそれは「出直し」が悲しみを「こと」化への動機とし得ない言葉の羅列にすぎない「もの」とするからである。

人間の葬儀が「物事」であるかぎり、それは具体的に未来に向けて「こと」化、すなわち「出来事」化されるべきであり、「出直し」の教理と非情な死のあらわれがわたしたちに要請するのは、「仕切り力」「仕切り知恵」「仕切り根性」を手立てとした「仕切りの道」への信仰的实践である。それは個々人信者と教団組織の総体的なあらたな「出直し」の「心定め」、つまり現代に対応し、未来を先取りする信心の元一日に還る真の「復元」への、あらたな諸改革への起死回生の決断であろう。そこでは相当な「仕切り知恵」が求められる。「仕切り力」や「仕切り根性」はその後についてくるといのが「元の理」における親神の人間への「知恵の仕込み」から拝察されるからである。「元の理」における最後の人間完成への「文字の仕込み」には、創造主の深い「知恵の仕込み」が盛り込まれているはずである。

天理教中山善衛3代真柱（1932～2014）は去る6月24日、午後7時55分、81歳をもってご自宅で出直され、その告別式が7月6日教内外から2万人余りの会葬者の参列のもと厳かに行われた。教祖130年祭を1年半後に控えた教団にとってはまさに刻限ともいえるお出直しである。「仕切り力」「仕切り知恵」「仕切り根性」とは、教祖110年祭執行について平成5年に3代真柱によって発布された「論達」第4号の「おさしづ」からのキーワードである。3代真柱がこの「仕切り」を自力的に「こと」化された事例は数多くあると思われるが、そのいくつかを「論達」の字義と「論達」四号にもとづいて記しておきたい。

まず『字訓』から説けば、「論」とは「神の言葉」を刀として精神の膿を摘出し、魂の治癒を行うと言う意味を持っているとされる。そして、その結果得られる「愉」の心情は、読み手の心身の奥底から陽の気、つまり勇を喚起することが期待され、また「達」は通るという意であり、道に渋滞がなく妨害がないことを示し、事理・天の理に通ずることを言うと言明される。詳細は拙著『天理教学の未来—二十一世紀への胎動』（天理やまと文化会議）第1章第3節の『「論達」考』を参照いただければありがたい。

ちなみに「切る」とは、親神十全の守護のなかで「たいしょく天」

の働きであることを念頭におきたい。その「元の理」における思想的解釈において、哲学者大橋良介は「どじょう」の6つの特徴である無名性、無性、無方位、無規定性、無数性、無形性をテキストから読み込み、つづいて「ふぐ」の守護である「切る」の特徴を7範疇に分類している。それは生死の縁、胎縁そして女性原理、この世の「はさみ」、毒がある、鬼門の方位、女神であること、そして神名のたいしょく天である。とくにこの神名だけは他の神名はすべて和名だが「天」という漢音の名前がついているという点に氏は注目し、「どじょう」は日本のとくに大和の土着原理としての自然性を最も典型的に表しているのに対して、「ふぐ」は異国原理の「切れ」を示していると指摘している（『「元の理」の動物学』天理やまと文化会議、講座「元の理」の世界4、「元の理」と『「切れ」の構造』、341～369頁。）したがって氏の主張する「切れつづき」の思想は、「つなぎ」のくにさづちの「亀」の守護の働きと協働しなければ実現できないと言う構造に「元の理」では位置づけられていると解釈する。「から」と「にほん」の対比が、異国原理の「ふぐ」とやまと原理の「かめ」にも認められるが、この課題についてはいずれ「本居宣長」の項で触れることにしたい。

わたくしが主張したいのは、3代真柱が達成された偉業が、以上の「元の理」の原理にもとづいていたものであったと気づくこと、つまり「元の理」による「こと」化の成就にあったという点である。第一は教祖口授としての「みかぐらうた」の旋律の基準化である。この「こと」は、「みかぐらうた」の旋律がアメリカのネグロススピリチュアル衰退の危機を救った原因の一つにもなったと思われる。この消息はジャズの聖者とも言われたコルトレーン来日時に「みかぐらうた」を「ジャパン」と題して編曲された史実にのこされている（拙著『みかぐらうた』地域社会研究所、188～194頁参照）。第二に東西礼拝場普請と同時に決断された、しめ縄等の神道色の撤廃、第三に埋葬による墓地信仰からの脱却である。後者は3代真柱の遺言としてあったのであろう。たまたまこの項を執筆して7月30日付『朝日新聞』朝刊のトップページは、日本における「墓」の社会問題で写真入り2頁にわたり、「墓」は社会のありようを映し出すとして「無縁 墓の墓場」、「高松 山中に1万墓」「不法投棄相次ぐ」「過疎・少子化各地で墓撤去」「継承前提 時代に合わず」といったキャプションをかかげて特集を組んでいた。

3代真柱の御功績は、「たいしょく天」の異国原理と大和の神道国家原理である「から」の思想が、「切れ」の「仕切り根性」「仕切り知恵」「仕切り力」で逆否定されることから成就された。とくに注目されるのは、東礼拝場普請において発見された驚くべき古代地底層の発見であった。おやさとかた真東棟の東側で発掘されたやまと国中の水源として約2～3万年前からの布留天理遺跡を経て噴出していた山中からの水流が、西方の甘露台の直下地底河床をうるおし、現在の布留川の最北端でもあったという発見である。そこから7世紀前後の物部氏が祭具に使ったと思われる数多くの琴の一部や馬の歯や頭骨などが発掘された考古学的発見は関係学者を驚嘆せしめた。この古代河畔地底の一空間の上方地点に中山家の母屋があり、のちほどとりこぼされて中庭となり、その場所で明治8年（1875）かぐらつとめの中心である人間宿し込みのかんろだいの「ぢば」定めが行われたのであった。四方正面実現の東西礼拝場普請における3代真柱の「仕切り知恵」は、「元の理」のテキストである「泥海口記」の解釈から、あらたな海洋文明につながる大和独自の縄文・山・国中の河川文化や天理「グローバル思想」が抽出できる可能性の扉を力強く開いたと思われる。